

Title	家永三郎著 植木枝盛研究
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.889(77)-
JaLC DOI	10.14991/001.19601101-0077
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ないだろうか。北原氏が、「資本の集積・集中と分裂・分散の法則」の、日本における貫徹の仕方の特徴づけるのは、なによりも日本資本主義の発展によって規定された、「極度に低廉な労働力の甚大な存在」であるといわれるとき、その論旨はたしかに説得力をもってゐる。しかし、ここでも戦前の日本資本主義における中小企業の位置は、そのりんかくが比較的はつきりしているのに、戦後日本独占資本主義の機構と中小企業の関係については、むしろ不鮮明なきらいがあり、現代資本主義の追及がやはり弱いように思われる。

小林教授は、この第二巻「序論」において、戦後日本の独占資本と中小資本を分析するための「視角」として、財閥解体、農地改革、植民地喪失、最近の国際競争と技術革新など、一連の問題を提起さ

れているけれども、こうした点の確な研究、すなわち現代資本主義論を土台とした戦後日本資本主義の研究が、中小企業研究にも強く要求されるのではないだろうか。

要するに私が指摘したいのは、一般理論にしろ現状分析にしろ、中小企業研究に当面要請されるのは、もっとその視野を拡げることではないかということである。中村・北原両氏の労作、そしてこの第二巻が、その方向にむかつての里程碑であることを十分承知した上で、自らへの反省をふくめて、重ねて「視野の拡大」を強調する次第である。(一九六〇・九・一〇)

(有斐閣・A5・三〇二頁・四〇〇円)
(九州産業労働科学研究所員・戸木田嘉久)

新刊紹介

家永三郎著

『植木枝盛研究』

日本近代思想史の研究は、最近とみに盛んになってきたが、ほんとうに読みごたえのある本はすくない。しかしそのなかにあつて、本書は、著者の思想家としてのゆたかな学殖、すぐれた問題意識そしてさらに完璧な史料の把握が、遺憾なく発揮された力作であるといふことができる。このみじかい紹介で、膨大な本書の内容について、何かまとまったことを書こうというとは無謀なくわだてである。ただ、このすぐれた業績の意義について筆者の見解をのべ、日本近代史に関心をよせる人々に一読を奨めるものである。

本書は、序論 植木枝盛研究の課題、第一編 思想家として世に出るまで、第二編 自由民権運動の時代、第三編 社会改良運動の時代、第四編 自由党再興の時代、結論 植木枝盛の思想の歴史的意義、から成っている。いうまでもなく植木枝盛は、日本における民

主主義運動の先駆的形態としての自由民権運動に、理論的な基礎づけを与えることによつて貢献した革命的な思想家のひとりであり、彼の名が、明治一〇年代から二〇年代にかけての目ざましい活躍と輝かしい名声にもかかわらず、今日ほとんど忘れられているのは、著者が鋭く指摘されているように、「歴史の進行による自然淘汰の結果としてではなく、特殊の政治的工作に基いて故意に世間から遮断されてきたためであり……、枝盛の業績が埋没してきたのは、むしろその内容があまりにも生命にみちていたために招いた反作用の結果にほかならなかつた」のである。こうした事実こそ、今日われわれをして一層この研究に注目させるのである。

本書の一大特徴は、植木枝盛の公私にわたるすべての活動を、現存のあらゆる史料を駆使して彼の人間像を浮き彫りにすると同時に、その革命的民主主義思想を現代的な視角から再検討している。いろいろな興味深いエピソードが数知れず織りこまれていて、ために、非常に大部であるにもかかわらず、著者の含蓄の深い魅力ある文章と相まって、最後まで読者をひきつけずにはおかないであろう。本書を読むことによってわれわれは、日

本近代思想史にたいする新しい認識をうることができることを確信する。なお、同じ著者による「革命思想の先駆者——植木枝盛の人と思想——」(岩波新書)、「数奇なる思想家の生涯——田岡嶺雲の人と思想——」(岩波新書)も併せ読まれることをおすすめしたい。(岩波書店発行・昭和三五年八月・A5・七九二頁・一、五〇〇円)

—飯田 鼎—

柴田三千雄著

『フランス絶対王政論』

フランス革命は農民革命として、封建的土地所有の破棄のため戦われた。しかし革命で破棄の対象となつた封建的土地所有の歴史的内容は十分に解明されておらず、このためフランス革命の歴史的位置づけをめぐつて見解が分れていることは周知のところであろう。従つてフランス革命史の研究で、絶対王政期における土地問題の究明は、フランス革命理解につながる問題として、重要な意味を持つものであつた。本書はこれと取組んだ最新の成果である。

従来わが国では革命期を絶対王政期との関